

「地獄と極楽—盂蘭盆会に因んで—」

1、盂蘭盆会（うらぼんえ）

サンスクリット語「ullambana」→「烏藍婆拏（うらんばな）」、「倒懸（とうけん）」と訳される。「逆さ吊りの苦痛」を意味するという。またはイランの言語「urvan」→「靈魂」を意味する言葉に遡るという説もある。

『盂蘭盆経』（中国撰述、成立年は諸説あり）「目連救母説話」

お釈迦様の高弟の一人に目連という人がいました。神通力に優れており、あの世にいる母親の姿を見たところ、何と母親は地獄にいて逆さ吊りの苦しみにあっています。

そこで、目連はお釈迦さまに母親を助けるにはどうしたら良いのか尋ねました。

すると、7月15日に多くの僧をもてなし、供養の布施行を行えば、その功德によって逆さ吊りの苦しみも解かれるであろう、と助言を受けます。⇒盂蘭盆会、お盆の起源

『ぶつせつぐめんぜんがき だらにしんじゆきょう 仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』（じつしゃなんだ 実叉難陀訳）、『くぼつえんくがき だらにきょう 救跋焰口餓鬼陀羅尼経』（ふくう 不空訳）などには、

六道で飢餓に苦しむ餓鬼道におちた衆生（成仏してない者）に清浄な水や食物を施し供養すると、施餓鬼会をした施主自身の福德長寿が増すという。⇒施餓鬼会の起源

日本では空海が伝えたといわれ、平安時代中期から密教系の僧侶により行われ、後に盂蘭盆会と習合し、鎌倉時代末から各宗派で行われ、特に禅宗で盛んに行われたという。

⇒「盂蘭盆会」と「施餓鬼会」は本来は違うもの。

2、地獄の思想

サンスクリット語「naraka,niraya」→「地獄」、「奈落（ならく）、泥黎（ないり）」と訳される。

……「地底あるいは海の遙かかなたにある死者の世界、地下の牢獄」という意味。

『だいちどろん 大智度論』には輪廻転生による「六道（りくどう）」の一つとして、地獄のことを以下のように記している。

⇒善悪を分別し、それを六道という。善には上中下あり、天、人、阿修羅である。

悪にも上中下があり、地獄、畜生、餓鬼道である。

『ぐしゃろん 俱舍論』には仏教の宇宙観が説かれ、その中に地獄の位置も示されている。

⇒世界の真中に須弥山が高くそびえ立ち、その周りに7つの山があり、その山の外に海が広がっている。その海の東西南北に4つ島があり、そのうちの一つが南の瞻部洲、ここに人間が住んでおり、その地下に地獄があるという。

『大智度論』などには、南・瞻部洲の地下にある地獄には、八つの地獄があると記す。

⇒①^{とうかつじごく}等活地獄 ②^{こくじょうじごく}黒縄地獄 ③^{しゅうごうじごく}衆合地獄 ④^{きょうかんじごく}叫喚地獄

⑤^{だいきょうかんじごく}大叫喚地獄 ⑥^{しょうねつじごく}焦熱地獄 ⑦^{だいしょうねつじごく}大焦熱地獄 ⑧^{あびじごく}阿鼻地獄……**八熱地獄**

①^{あんぶだじごく}額部陀地獄 ②^{にらぶだじごく}尼刺部陀地獄 ③^{あんせつたじごく}額唌吨地獄 ④^{かかぼじごく}臞臞婆地獄

⑤^{ふふぼじごく}虎虎婆地獄 ⑥^{うばらじごく}唄鉢羅地獄 ⑦^{ぼどまじごく}鉢特摩地獄 ⑧^{まかぼどまじごく}摩訶鉢特摩地獄……**八寒地獄**

3、冥界と地獄

① 中国における冥界

仏教が伝来する前に、死者の魂は太山（山東半島の泰山）に集まり、そこにいる太山府君（泰山府君）が魂の運命を握っているとされた。あるいは崑崙山に昇仙すると考えられていた。

例えば後漢時代の墓から出土した壺の表面の朱書きには、「天帝の使者、謹んで柳氏の家の為に冢墓ちやうぼを安穩ならしむ。謹んで鉛人（鉛の人）と金と玉を以て使者の為に適を解き、生人のために罪を除かんとす……」⇒死者の行く末を天帝が司る。

六朝時代から隋唐代にかけて、一度死んだ人間が何らかの理由で蘇生して戻ってくるという話が小説類に多くみられる。例えば『酉陽雜俎ゆうようざんそ』（唐代・860年頃）には「元和の初め（9世紀初）、漢州の孔目典であった陳昭は、病のせいで、黄色衣を着た一人の人物がやって来るのをみた。彼はベッドの前に出ると「趙判官がお前をお呼びである」と言った。昭がどこから来たのか尋ねると、冥界より来たと答えた。……路はとても平坦である。十里ほど行くと、ある城まちに到着した。府城（成都府城）ほどの大きさで、兵士が門を守っている。一人の人物が見えたが、驚くほどの怒りの形相である。これが趙判官である。

また、『日本霊異記』にも影響を与えた『冥報記』巻中 隋大業客僧（唐代・唐臨撰）には、「隋の大業年間（605－615）にある客僧が大山廟（太山廟）に行きついて一夜の宿を求めた。廟令は『ここには特には特に宿坊はなく、神廟のひさしの下で寝泊まりできるだけです。しかしこのところ、寄宿された方はいずれも亡くなっております』と言ったが、僧は『まったく構いません』と答えて泊めてもらうことにした。……なわかに神が現れ、僧に向かってお辞儀をした。……僧は『二人の同学僧が先に亡くなっております。どうか彼らに会わせてください。』とお願いすると、神は彼らの名を尋ねてこう言った。『一人はすでに人間界に生きており、一人は地獄におります。後の者は罪が重く面会がかないませんが、師と同行して出向くなら会うことができます。』僧は甚だ悦び、そこで一緒に出かけて門を出ると、ほどなくある場所に着いた。廟獄がたくさんあるのが見え、火炎が盛んに上がっている。神が僧を連れてある院に入ると、遙か遠くに一人の人物が見える。火炎の中で何事か叫んでいるが声が届かない。姿形は変わり果てて誰だか分からない。血肉の匂いが鼻について、たまらなく悲しい気持ちにさせる。」

② 冥界の審判

中国では冥界において審判があるとされ、亡者は死んでから七日ごとに十人の王によって裁きがあると考えられた。道教の影響が大きい。閻魔（羅）王以外は道教神が起源といわれる。

初七日：秦広王、	二七日：初江王、	三七日：宋帝王、	四七日：伍官王
五七日：閻魔王、	六七日：変成王、	七七日：太山王、	百箇日：平等王
一周忌：都市王、	三周忌：五道転輪王		

十王は敦煌文書などに多く見られ、唐末から閻魔（羅）王信仰となって浸透していく。

⇒十王信仰 『十王経』（10世紀頃成立）

③ 地藏菩薩による救済

地藏菩薩は、インド・バラモン教の地神（地天）信仰に起源が求められる。これが六道救済の菩薩として広く信仰されるようになるのは、中国に伝来し唐代になってからである。

『大乗大集地藏十輪経』『地藏菩薩本願経』『占察善悪業報経』などの地藏三経には、地

蔵菩薩が無仏世界の衆生救済を委ねられた存在であることが説かれ、^{しょうもんぎょう}声聞形（比丘の姿）でこの世に現れると説かれる。また冥界では閻魔王や獄卒の姿をとって衆生救済にあたることも説かれる。

特に興味深いのは、唐末五代（10世紀前半）に道教において死後の裁きを司る十王への信仰が高まると、^{よしゅうじゅうおうしゅうしちきょう}『預修十王生七経』などが中国で撰述されると、地藏菩薩が十王の一人である閻魔王と同体という側面が強調され、地藏菩薩の信仰が死後の裁きに大きな影響を及ぼすという観念が民衆に広まった。こうして「地藏十王図」など仏教と道教の習合美術ができあがる。

④ 地獄の表現

『敦煌文書』「目連変文」には、地獄は以下のように描写される。

さて地獄という所は、黒い壁が千重にもめぐらされ、黒塗りの門は千仞の高さ、鉄でできた城は四方にそびえ立ち、銅の犬が吠えており、その口から紅い焰と黒い煙が出ております。この地獄の中で罪人達は一日のうちに万遍死に、万遍生まれることを繰り返します。ある者は、刀の山・劍の樹の上に登らされ、ある者は溶けた銅を口に灌ぎ込まれ、ある者は熱い鉄の火の玉を吞まされ、ある者は焼けた銅の柱を抱きかかえさせられ、体はただれ崩れます。首枷・手枷・足枷は身から離れることなく、牛頭は毎日痛み付け、獄卒はいつも拷問します。湯のたぎる釜でゆでられて、その痛み苦しみは何とも耐えがたく、罪のとがめの責め苦を受けてやむことはない。それ故に無間地獄と名付けるのです。

☆地獄の描写……亡者 獄卒 審判官 動物 武器類 炎 血液 地藏菩薩など

⑤ 日本における地獄の観念

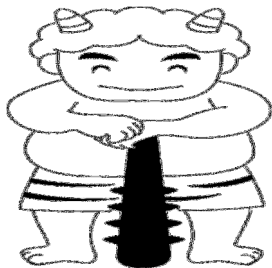
日本では、地獄と極楽の観念は天台僧・源信の著した『往生要集』（寛和元年・985）の影響が大きい。はじめの二章には「厭離穢土^{おんりえど}」と「欣求浄土^{ごんぐじょうど}」が述べられ、その後の日本で広く受け入れられていった。

『往生要集』の構成

卷上	卷中	卷下
大文第一 厭離穢土	大文第五 助念方法	大文第七 念仏利益
大文第二 欣求浄土	大文第六 別時念仏	大文第八 念仏証拠
大文第三 極楽証拠		大文第九 往生諸行
大文第四 正修念仏		大文第十 問答料簡

<厭離穢土>……迷いの世界である六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）を説く。
その地獄には「八熱地獄」があるとし、『大智度論』など載る八つの地獄をあげている。なお源信は、八寒地獄もあるといいながら詳細について述べていない。

<欣求浄土>……浄土に生まれることを願い求めると、十種の楽がもたらされると説く。
聖衆来迎（仏菩薩の迎えに来てくれる）蓮華初開（蓮華の名は画初めて咲く）
身相神通（種々の神通力が得られる）五妙境界（五感で美妙を極められる）
快樂無退（無尽の快樂を享受できる）引接結縁（縁者を極楽に連れて来られる）
聖衆俱会（仏菩薩と一緒にいられる）見仏聞法（仏に会い教えを受ける）
随心供心（諸仏の供養が存分にできる）増進仏道（悟の道に進むことができる）



「世の中は 地獄の上の 花見かな」(小林一茶)

4、極楽浄土

浄土教の成立に関しては、中央アジア、あるいはイラン、アフガニスタンという説がある。なぜなら、中央アジアに浄土教の経典や絵画があるのにインドにはないという理由からである。一方、マトゥラー起源を唱える学者もいる。それは脚部のみ発見されている台座の銘文から推測されているものである。ドイツ人が1976年に発見しており、フィヴィシユンカ大王28年という銘があり、これを西暦106年とする説と156年とする説がある。

「フィヴィシユンカ大王の第二八年の雨季の第二六日。この時機に隊商であるサットヴァカの孫であり、富商であるバラキールタの孫であり、ブッダバラの子であるナーガラクシタが、一切諸仏を供養せんがためにアミターバ仏・世尊の像を建立した。この善根により、一切諸仏の無上の仏智が説かれんことを」

(中村元選集『仏教美術に生きる理想』春秋社)

⇒中村元氏によれば、浄土教が盛んになったのはマトゥラーあたりではないかという。

『阿弥陀経』（岩波文庫『浄土三部経』）

シャーリプトラよ、ここから西方に百万億の仏国土を過ぎたところに「幸せのあるところ」という名の世界がある。そこに無量寿と名付ける如来、尊敬されるべき人、正しく目覚めた人が現に今住んでおり、身を養い、日を送り、法を説いている……この世界は……幸福の要素が無量にあるばかりなのだ。

⇒浄土には阿弥陀如来がいる。ただし、インドで阿弥陀の造形は確認できていない。

5、極楽浄土の光景

浄土三部経（『阿弥陀経』『無量寿経』『観無量寿経』）にみられる浄土の光景

① 『阿弥陀経』の浄土描写の部分

その時、仏は長老舍利弗に言われました。

「これより西の方角、十万億の仏の国を過ぎて世界がある。極楽という名前である。その世界に仏がおり、阿弥陀と言ひ、今現在、法を説いておられる」

舍利仏よ、何故にかの国は極楽と名づけるのか。この国の衆生には苦がなく、ただ諸々の楽しみを受けるので極楽と名づける。

また舍利弗よ、極楽の国は七重の柵と七重の網、七重の並木があり、これらはみな、四宝で出来ていて周りを囲んでいるので、それ故極楽という。

また、舍利仏よ、極楽の国には七宝のでできている池があり、八種類の徳を具えた水が満々ている。池の底は金の砂が一面に敷き詰められている。

四方には階段の道があり、金・銀・ルリ・ハリ・が組み合わされている。その上には楼閣があり、金・銀・ルリ・ハリ・シャコ・赤い玉・メノウで美しく飾られている。

池の中には蓮華が咲いており、大きさは車輪のようである。青い蓮華は青く光輝き、黄色い蓮華は黄色く光輝き、赤い蓮華は赤く光輝き、白い蓮華は白く光輝いていて、いずれも清らかな香を放っている。舍利仏よ、極楽の国とはこのように功德の莊嚴で満たされている。

⇒西方に極楽があり、阿弥陀仏がいる。

② 『無量寿経』巻下の浄土描写の部分

もし衆生ありて、明らかに仏智、乃至、勝智を信じて、もろもろの功德を作して信心回向する。このもろもろの衆生、七宝華の中において自然に化生する。跏趺して坐す。須臾の頃に身相・光明・智慧・功德、もろもろの菩薩のごとく具足し成就するであろう。

⇒蓮華から化生する。れんげけしょう蓮華化生。

③ 『観無量寿経』の要旨

マガダ国の太子である阿闍世(アジャータシャトル)が、提婆達多(デーヴァダッタ)にそそのかされて、父である頻婆娑羅(ピンピサーラ)国王を牢獄に閉じこめ餓死させる。太子の母である妃の韋提希(ヴァイデーヒー)は食物を体に塗り、瓔珞に入れるなどして国王に差し入れていたが、それが息子に知れて怒りをかい、幽閉されてしまう。韋提希は靈鷲山におられる仏に向かって教えを請う。仏は神通力で姿を現す。

仏が現れると、韋提希は地面に身を投げ、号泣しながら仏に訴える……「私は過去になんの罪を犯したことによってこのような悪い子を生んだのでしょうか。また世尊はどのような因縁があって、提婆達多という悪人と従兄弟なののでしょうか。世尊よ、私のために憂い悩むことなき処をお説き下さい。もはや私はこの濁悪の世をねがいません」

そこで、釈尊が眉間から光を放って諸仏の浄らかな国土(浄土)を現出される。韋提希はそれを見、特に阿弥陀仏の極楽浄土に生まれたいと訴え、そこに行く方法を説き示されるように仏に懇願する。そこで仏は、十六観を観想するようにと説く。……浄土へ往くための観法。

- ① 日想観、② 水想観、③ 地想観、④ 宝樹観、⑤ 宝池観、⑥ 総想観、⑦ 華座想観、⑧ 像想観、
- ⑨ 仏真身観、⑩ 観音想観、⑪ 大勢至想観、⑫ 普想観、⑬ 雑想観、⑭ 上輩上生観、⑮ 中輩中生観、
- ⑯ 下輩下生観 ⇒ 三部經典の描写が根拠となり、阿弥陀浄土の世界が具体的に描かれる

☆浄土の描写……蓮池 樓閣 阿弥陀三尊 蓮華化生 樂器 奏樂天人など

<九品浄土>

九品浄土は『観無量寿経』に説かれる。それによれば凡夫が生前に積んだ功德によって、それぞれに応じた浄土往生をするという。それには九段階あるといい、上品、中品、下品があり、その中に各々上生、中生、下生がある。合せて九品の浄土があるという考え方。その浄土に各々阿弥陀如来がいるとされ、九体の阿弥陀の存在が説かれている。往生する際に各々の阿弥陀が迎えにくるという。

そのため往生者の機根(きこん・仏の教えを受けて動きだそうとする衆生の能力、資質のこと)の高低、信仰の深淺が重視された。

上品・・・上品上生、上品中生、上品下生

中品・・・中品上生、中品中生、中品下生

下品・・・下品上生、下品中生、下品下生

→ 九品浄土

つまり臨終の際に阿弥陀が来迎する様相に差別があるということで九つ区分されるが、一つのお堂に九体の阿弥陀を並置することは、經典の意義とはあまり関係がない。おそらく造仏の数量によって功德の大きさを競った時勢の所産と考えられる。史料で確認できる九体阿弥陀の初見は藤原道長が寛仁四年(1020)に建立した法成寺無量寿院である。

今も昔も自分の死後、あるいは死者の行く末に思いを巡らせるのは同じであり、その信仰形態が地域と時代によって変化して、現代に続いている。

「極楽浄土は一処 勤めなければ程遠し 我らが心の愚かさにて 近きを遠しと思ふなり」(『梁塵秘抄』)